

われわれは 哺乳類なり 友である SARSが示す いのちのまこと

これは短歌である。一体どのような方が詠んだものかと思う方も多いことだろう。この歌人は、ハツカネズミの卵からネズミのかたちがなぜできるかを研究して世界的に名が出た頃に原因不明の病に倒れた生命学者、サイエンス・ライターである。

困難な病状の中で短歌と出会い「詠うことは生きることであった」と述べている。この作品の魅力の一つに、生命学者ならではの視点がある。新型コロナウイルスとの戦いに苦しんでいる私たちの今を、この歌人はどう見ているのだろうか。

掲出の歌を見てみると、一つのヒントがある。SARSは中国で猛威を振るったコロナウイルスである。人間の健康という観点からは敵だが、地上で自分を全うしようとする命の営みの厳粛さでは同じである。それゆえに「友」と呼んだのだろうか。

ウイルスが哺乳類の分化と多様性に作用したという説がある。この歌人は、より深く哺乳類である人間の命の源を視野に入れているのかもしれない。今の新型コロナウイルスとの戦いでも共存の覚悟を説く研究者は少なくない。そういう点からも掲出の歌は大切な示唆を与えている。

けものなら 死ぬであろうに 人ゆえに 医学によりて 生きて苦しむ

病状が進行し物を飲み込めなくなったとき、この歌人は医師に問いかける。「食べられなくなったら、動物は死ぬ運命ではないでしょうか」と。人間という単位ではなく、全ての生命体という観点から常に発想していることがわかる切ない言葉である。

しかし、生きることを繋ぎとめるべく苦しめた医学が、この歌人を死の淵から生還させる。

ふたたびの 生を授けん 新薬は 珊瑚の色の カプセルに入る

この歌人の歌を過酷な闘病歌と詠むだけでは十分ではないように思う。生きとし生けるものへの共感の世界でもあるのではないか。

ここ数か月でテレビを中心に、何人の“専門家”と呼ばれる方を知っただろうか。そのうち繰り返し同じ方を見るようになってきた。名前を覚えてしまった方もいるくらいである。

確か7月29日のことだったと記憶している。新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身会長が、専門家の立場から申しあげたことを政府は取り上げなかったと明言していた。このようなことが起きることは容易に想像できる。テレビを中心にコメンテーターとして出てくる専門家の方々が言っていることに、それほど大きな違いはないと思われる。簡単に言ってしまうと、専門家の考えはほぼ一致しているとなる。

だが、政策となると、そう簡単にはいかない。多くの方は、そのことを理解しているだろう。ワクチンの開発と供給を待ちながら、with コロナ、共存の覚悟が必要である。